

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

「虚辞」の it を含む構文の意味論的・語用論的研究

(Semantic and Pragmatic Studies on “Expletive” *It* Constructions)

氏 名

佐藤 翔馬

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、「虚辞」の *it* は指示対象を持たない要素ではなく、前方照応の代名詞の一員であるとする Bolinger (1977) の考え方を踏襲し、「虚辞」の *it* を含む構文を意味論的・語用論的に分析することである。

第 1 章では、本研究の趣旨と構成を説明する。

第 2 章では、第 3 章にて *it is that* 節構文を *it* 分裂文 (e.g. *It was a red sweater that I bought.*) の変種として取り扱うにあたり、主に Prince (1978) と Declerck (1988) に基づき、*it* 分裂文が持つ特性を確認する。具体的には、「1. *it* 分裂文は、前提となる要素の存在を必要とする。ただし、その前提となる要素は、話し手が知っている事柄であればよく、必ずしも聞き手も知っている事柄である必要はない。」、「2. *it* 分裂文は総記的含意 (exhaustiveness implicature) を持つ。ただし、その総記的含意は論理的含意 (entailment) ではないが、会話の含意 (conversational implicature) と言語規約的含意 (conventional implicature) の両方の性質を持っている。」という 2 つの特性を確認する。

第 3 章では、*it is that* 節構文 (e.g. *It's that I'm not pretty enough.*) を *it* 分裂文の変種と見なして分析を試みる。*it is that* 節構文は、「1. *it* 分裂文と同様に、*it is that* 節構文は前提として開放命題を必要とする。主語 *it* はその前提を指示し、その前提に含まれる変項を指定する値を焦点要素として取り立てることで、理由を提示する。」、「2. *it* 分裂文とは異なり、*it is that* 節構文の *it* が指示する前提は、聞き手の意識にのぼっていると話し手が判断している事柄である。」という 2 点を示す。

第 4 章では、*It is not that ...* と「…のではない」を比較する。*It is that ...* と「…のだ」ではなく、否定形の *It is not that ...* と「…のではない」を比較するのは、両者の違いをより際立たせるためである。第 4 章の主な目的は、「*it is that* 節構文は分裂文の変種である」という第 3 章の主張を支持することである。具体的には、*It is not that ...* を「…のではない」によって解釈することが困難な例が存在することを示し、その理由が、「*It is not that ...* が命題の真実性を否定しないのに対し、「…のではない」は命題の真実性を否定するからである。」ということを示す。さらに、このことを踏まえたうえで、「*it is that* 節構文はモダリティである」と主張している八木 (2019) を批判的に検討する。

第5章では、文主語構文 (e.g. *That he hasn't phoned worries me.*) と、主語位置からの *it* 外置 (e.g. *It worries me that he hasn't phoned.*) を取り扱う。主に中右 (1983) による既定性の概念に基づき、文主語構文が、「確定した話題を叙述することで、前の文脈との結束力を生み出す有標の構文であり、したがって、談話冒頭では不適切である。」ということを示す。また、主語位置からの *it* 外置については、主語 *it* の指示機能が希薄化していることを示す。さらに、*It may be that Minoan ships were built and repaired here.* のような文は、*it is that* 節構文に助動詞が介在している例ではなく、主語位置からの *it* 外置の例であることを示す。

第6章では、目的語位置からの *it* 外置の中でも、*resent (it) that ...* のように、*it* が随意的な例を取り扱う。具体的な目的は、「1. 目的語位置からの *it* 外置において、*it* が随意的な場合、*it* の有無は意味にどのように影響するか。」「2. *resent* などの動詞は、*it + that* 節を問題なく従えるが、*believe* などの動詞が *it + that* 節を従えるためには、否定や強い肯定などの環境を必要とするのはなぜか。」という2点を明らかにすることが目的である。1については、第5章で取り扱う主語位置からの *it* 外置と同様に、中右 (1983) による既定性の概念が関与しており、*it* が単に統語的に導入される虚辞ではないということを示す。2については、既定性の概念に加え、Cattell (1978) および Hegarty (1992) による動詞の3分類に基づき、それぞれの動詞の意味の違いが *it + that* 節を従えやすいかどうかに影響していることを示す。

第7章では、目的語位置からの *it* 外置の中でも、*take it that ..., have it that ..., like it that ..., find it ADJ that ...* のように、*it* が義務的に要求される事例を取り扱う。Kim and Sag (2005) は、主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar, HPSG) の考え方に基づき、語彙的構造 (lexical construction) によって目的語位置からの *it* 外置を説明しようと試みている。具体的には、Kim and Sag (2005) は、「目的語位置からの *it* 外置を許すのは、名詞句と *that* 節のどちらも従えることができる動詞である」と主張している。しかし、上記の *take* などの動詞は、名詞句は従えるが、*that* 節を従えることはできないにも関わらず、目的語位置からの *it* 外置が可能であるため、Kim and Sag (2005) による主張によって説明することはできない。Kim and Sag (2005) は、このような動詞に関しては、少数の例外として扱うに留めている。第7章では、第6章で取り扱う *it* が随意的な事例と同様に、*it* が義務的な事例であっても、*it* は単に統語的に導入される要素ではなく、やはり中右 (1983) による既定性の概念が関与していることを示す。

第8章では本研究が *It says LOC* 構文と呼ぶ、*It says in the Bible ...* のような文を取り扱う。Bolinger (1977) によれば、\**In John's letter it says that ...* のような文は不適切であり、その理由は、「*it* が一般的 (general) すぎ、*letter* が特定の (specific) すぎる」からである。しかし、*it* が単に *John's letter* を指示しているのであれば、特に問題がないと予測されるため、*It says LOC* 構文の *it* が、単に場所句内の名詞句を指示しているとは考えにくい。第8章の目的の1つは、「Bolinger (1977) が述べている「一般的」と「特定の」は何を意味しているか」を明らかにすることである。具体的には、「*It says LOC* 構文は、特定の書き手を明示することが困難であったり、不要であったりといった場合に用いられる。したがって、特定の書き手を明示することが可能である場合や、明示しても差し支えないような場合には *it* はそぐわないため、その意味で *it* は「一般的」である。一方、*letter* は特定の書き手を明示しやすいため、その意味で「特定の」である。」ということを示す。さらに、Bolinger

(1977) は、「場所句が it に先行している場合 (e.g. In the Bible it says ...) よりも、it が場所句に先行している場合 (e.g. It says in the Bible ...) のほうが普通である」と述べている。その理由として、「It says LOC 構文における it は、場所句に含まれる名詞句と照応関係にあるわけではない。それにもかかわらず、場所句を先行させると、it がその場所句に含まれる名詞句との前方照応性を強いられているように感じられ、その結果、不自然さを感じさせる。」ということを示す。

第 9 章では結論として、各章のまとめを述べる。